

学生海外調査研究	
ヨアヒム・ラフの1850年代から70年代の活動状況を中心とする現地資料調査	
氏名 倉脇 雅子	比較社会文化学専攻
期間	2016年11月9日～2016年12月1日
場所	ドイツ（フランクフルト、ヴィースバーデン、ヴァイマル、ミュンヘン）及び スイス（チューリッヒ、ラーヘン）
施設	フランクフルト（J.C.ゼンケンベルク大学図書館、ホーホ音楽院、フランクフルト中央墓地） ヴィースバーデン（ヘッセン州立図書館、ラフの住居） ヴァイマル（ゲーテ・シラー・アーカイヴ、アンナ・アマリア図書館、フランツ・リスト高等音 楽院、ヴァイマル国民劇場） ミュンヘン（バイエルン州立図書館） チューリッヒ（グロスミュンスター、チューリッヒ中央図書館）、ラーヘン（ラフ協会）

## 内容報告

### 1. はじめに

19世紀中葉にドイツ語圏を中心として活躍した作曲家の一人にヨアヒム・ラフ（Joachim Raff, 1822-1882）がいる。修士論文では、ラフの交響曲第1番《祖国に An das Vaterland》op.96（1859-61）（以下、《交響曲第1番》とする）の作品研究を行った。ラフの交響曲はこれまで「折衷的書法」（Deaville 2001:750）という見方に表れるように標題と音楽の関係を二項対立的な観点から述べられてきた。しかし、音楽構造と標題の関係について分析した結果、この両者には多様かつ分離できない包摂的な関係をもつことが明らかとなった（倉脇 2016）。ここから博士論文では、さらにラフの標題交響曲を作品と書簡や論文を中心とした資料の分析からその成立過程を示し、新ドイツ派とよばれる当時の楽派において彼がどのように位置づけられるかを作品と文献から明らかにすることによって、ラフという観点から19世紀中葉のドイツ・ロマン派音楽について考察を行うことにしている。

今回の資料調査では、ラフの活動において重要である1850年代から1870年代を扱う。ラフの音楽活動は時期ごとに拠点を変えて行われている。1849年から1856年にかけてラフはヴァイマルで活動を行った（以下、ヴァイマル期とする）。その後1856年にヴィースバーデンに居を移した後1877年まで同地に滞在して交響曲をはじめとする集中的な作曲活動に入るのである<sup>1</sup>（以下、ヴィースバーデン期）（Marty 2014: xviii-xix）。

### 2. 先行研究

ラフがヴァイマルに来たのは、フランツ・リスト（Liszt Franz, 1811-1886）の助手を務めるためであった（Deaville 2001: 749）。ヴァイマル期のラフについては、ラフの娘であるヘレーネによる回想録（Raff, H. 1925: 85-152）を始めとして、マーティによる最新の伝記（Marty 2014: 102-193）のなかで扱われている。また、リストの管弦楽作品におけるラフの関与についての研究（Bertagnolli 2002）、新ドイツ派とみなされているラフ（Leuchtmann 1997: 239; Altenburg 1997: 68）について再検討を行った研究（Bayreuther 2003; Steinbeck 1997）がある。ヴィースバーデン期のラフについては、上記のヘレーネ（Raff, H. 1925: 153-214）とマーティ（Marty 2014: 194-321）による活動の記録とこの時期に書かれた作品研究が主となっている。交響曲の作品研究は、ミュラー＝ロイターの、第3番《森にて Im Walde》op.153（1869）について（Müller-Reuter 1898; 1905）、第5番《レノーレ Lenore》op.177（1872）について（Müller-Reuter 1898）があり、近年では、シュタインベックが《交響曲第1番》を取り上げている（Steinbeck 1997）。そしてマティアス・ヴィーガンは音楽における垂流をテーマとした研究（Wiegandt 1997）のなかで、交響曲第4番 op.167（1871）、第5番、第9番 op.208（1878）を扱っている。また、標題交響曲についてはキャロル・S・ベヴィアーによる全作品研究があり（Bevier 1982）、ピーター・ブラウンは交響曲作品全11曲の作品研究を行っている。（Brown 2007）。

### 3. 調査の目的と意義

調査目的は、①1850年代から1870年代におけるヨアヒム・ラフ（Joachim Raff, 1822-1882）の活

動状況を示す一次資料を調査すること、②スイス、ドイツにおけるラフ研究の現状を把握すること、③楽譜（自筆譜や初版）や文献（書簡、論文、プログラム、告知）の一次資料の所在と入手方法の確保することである。

①について、この期間は彼の活動拠点からみるとヴァイマル期（1850年から1856年）と、ヴィースバーデン期（1856年から76年）にあたる。ヴァイマルは当時、リスト、リヒャルト・ヴァーグナー（Richard Wagner, 1813-1883）をはじめとする新ドイツ派とよばれる作曲家たちが多く集まった場所である。ラフは彼らの賛同者（Raff 1854）である一方で、「極めて慎重かつ批判的に新ドイツ派の陣営に加わった」（Leuchtmann 1995: 239）とされる。そしてこの楽派の脱会（1856年）が創作上の自立の契機となり（Raff, H 1925: 151）、その後のヴィースバーデン期において交響曲8作品を含む集中的な創作活動を行うことになる。この転換期における彼の音楽的見地や創作について一次資料（手稿譜、初版、書簡集、活動記録）の調査を行うことはラフの独自性を探る上で重要であると考えられる。そして②について、日本においてラフ研究は報告者が確認した限り本修士論文が初めてであるが、19世紀中ごろのドイツ語圏の交響曲を対象とする諸研究、例えばレベッカ・グロートヤーン（Grotjahn 1998: 14）、ヴィーガンツ（Wiegandt 1997: 35）、フランク・E・カーヴィー（Kirby 1995: 197）はこれまであまり取り上げられてこなかった作曲家たちをどのように再評価しうるかについて、従来とは異なる観点から考察を行っている。そしてラフについては、シュタインベックが歴史的立場づけにおいて再評価を行った（Steinbeck 1997）ようにラフ研究自体が見直されてきていると考えられる。このため現在のスイス、ドイツにおけるラフ研究の状況を知り、意見交換を行っていくことは日本におけるラフ研究において重要である。③について、ラフの一次資料について書簡や論文といった文献資料が多く残されていることが明らかとなった半面、楽譜に関して初版はあるものの自筆譜について不明な作品が多いことが分かった。これは調査を継続的に行う必要があることを示唆しており、現在ラフの資料を所蔵している図書館、アーカイブとの連携を保つことが必要となる。

#### 4. 調査の方法と対象

調査方法は現地での視察、聞き取り、そして資料調査である。ラフの生涯を概観すると彼の活動は各時期において拠点が変わっている。そのため、今回の調査ではフランクフルト、ヴィースバーデン、ヴァイマル、チューリッヒを視察するとともに、ラフの娘であるヘレーネによって寄贈された一次資料（Leuchtmann 1995: 239）が保管されているミュンヘン（バイエルン州立図書館）を周遊した。

調査の方法とその対象は以下の通りである。

- ①1850年代から70年代のヴァイマル期のラフの活動状況について、作品と文献の資料調査を行う。作品研究の基盤となる交響曲第1番から第11番<sup>2</sup>までの初版、そしてヴァイマル期に書かれた作品のなかで重要な作品として注目している、オペラ《アルフレッド王 König Alfred》WoO.14（1849）、及びリストによる《アルフレッド王》のピアノ作品、ラフによるヴァーグナーのオペラのピアノ編曲作品 op.61~63 を調査対象の中心としてこれらを手掛かりに関連作品を新たに調査するものとした。また文献資料では、ヴァイマル期に書かれた書簡、論文、特に新ヴァイマル協会におけるラフの活動を知り得る一次資料の収集に重点を置いた。調査の場所は、フランクフルト：J. C. ゼンケンベルク中央図書館（ZB）、ヴィースバーデン：ヘッセン州都アーカイヴ、ヴァイマル：ゲーテ、シラー、アーカイヴ、アンナ・アマリア図書館 及びチューリンゲン州立音楽アーカイヴ、ラッヘン：ラフ協会、ミュンヘン：バイエルン州立図書館の各担当者と読書室と閲覧予約の打ち合わせを事前に行い、現地で資料の閲覧及び複写依頼を行う。
- ②ラフ研究の状況を知るために、ラフ協会（スイス、ラッヘン）においてレス・マーティ会長及び、ラフ研究者であるセヴリン・コルブ氏との意見交換を行う。
- ③今後の課題として調査中に得た資料と新たな情報について整理するとともに調査全体の考察を行う。

#### 5. 調査の成果

##### 5.1 フランクフルト：J. C. ゼンケンベルク中央図書館（ZB）

予約した資料の閲覧とそれらの資料の一部を撮影することが特別に許可された。

##### 5.1.1 資料の内容

①作品研究の基礎となる交響曲の初版の閲覧。

②ヴァーグナー作品のピアノ・リダクション譜の閲覧と撮影。

- i. *Reminiszenzen aus Richard Wagner's Oper Die Meistersinger von Nürnberg für Pianoforte. Teil:1.* 出版社：マインツ：ショット社、出版年：1868年、【Mus. pr. Q 80/353 Bd. 1】
- ii. *Reminiszenzen aus Richard Wagner's Oper Die Meistersinger von Nürnberg für Pianoforte. Teil:2.* 出版社：マインツ：ショット社、出版年：1868年【Mus. pr. Q 80/353 Bd. 2】

iii. *Reminiscenzen aus Richard Wagner's Oper Die Meistersinger von Nürnberg für Pianoforte. Teil:4.* 出版社：マインツ：ショット社、出版年：1868年【Mus. pr. Q 80/353 Bd. 4.】

iv. *Fliegender Holländer.*

出版社：アーヘン：メーア社，出版年：1856年【Mus pr. Q 80/179 Bd. 1】

③《アルフレッド王》のリブレットの閲覧。

*König Alfred : große heroische Oper in vier Aufzügen ; Arien und Gesänge*

音楽：ヨアヒム・ラフ、 テクスト：ゴットホルト・ロガウ

出版社：ヴィースバーデン：フリートリッヒ社、出版年：1852年 【Mansk Mus II 180/942】

### 5.1.2 視察

ラフのフランクフルト期（1877年から1882年）における関連施設の視察（ホーホ音楽院音楽院、及び中央墓地を併せて行った。（今回の調査では、フランクフルト期の資料はフランクフルト・ゼンケンベルク大学図書館及びホーホ音楽院図書館にあることを確認するにとどめている。）

### 5.2 ヴィースバーデン

ヘッセン州立劇場とヴィースバーデン期にラフが住んでいた住居（Stiftsstrasse 10, Wiesbaden）の視察を行った。また、ヘッセン州立アーカイヴには、ヴィースバーデン宮廷劇場での公演の告知の資料がある。この資料は現在オンライン化進められていることが閲覧予約の段階で分かったため今回はゼンケンベルク中央図書館での調査を優先した。また担当のアイヒラー博士から、ラフの資料について報告者がこれまで知り得ないライブツィヒ、ペーターズ社、並びにゲーテ大学中央アーカイヴ所蔵の資料についての助言を得た。

### 5.3 ヴァイマル

ゲーテ・シラー・アーカイヴでは、新ヴァイマル協会設立当時のラフの自筆の記録、ラフ作品をリストが編曲した自筆譜、ラフからリスト宛の書簡の閲覧と一部の複写を許可された【GSA 961:2263~2265; 1081:620; 146:157; 151: 98; 151:280】。また、リープシュ氏から、ラフ、リスト、そしてヴァーグナーに関する新たな情報を得ることが出来た。そして、リープシュ氏からヴァイマルリスト高等音楽院内にあるチューリッゲン州立音楽アーカイヴのホフマン氏を紹介頂き、《アルフレッド王》のオーケストラスコア、役付きパート譜、合唱譜の一式を閲覧することが出来た。オーケストラ譜は現在ベルリンのアーカイヴにおいてオンライン化されているが、同アーカイヴにおいて役付きと合唱の楽譜を含めて閲覧することが出来たのは貴重であった。今回はそれらの一部をデータ化してクラウド送信して頂いた【D-WRha DNT 363】。またヴァイマル宮廷劇場で開催された演奏会の告知はオンライン化されていることを教えて頂きラフのヴァイマルでの演奏会資料の精査は後日行うことに変更した。アンナ・アマリア図書館では2004年の火事のために消失した資料【Mus. V:453】及び【Mus. V:IIIa:6】についてはBSB（バイエルン州立図書館）に所蔵されているとの追加情報を頂きミュンヘンで閲覧することにして、ヴァーグナーの《ローエングリン Lohengrin》（1850）【Mus. 11b:15】を閲覧した。

### 5.4 チューリッヒ（ラッヘン）

チューリッヒ大学博士課程においてラフ研究を行っているコルブ氏の案内でラッヘンに向かい、ラフ協会会長であるマーティ氏と3名でチューリッヒ湖畔のラフの記念碑、オルガニストを務めていた教会を視察した後ラフ協会（<http://joachim-raff.ch/>）にてラフ研究についてインタビューを行った。ラフ協会の活動についてマーティ氏に伺ってみたところ、現在ラフの書簡や記録といった一次資料の翻刻とそれらを体系的に整理する企画を進めており、およそ3年後の完成を目標としているとのことであった。マーティ氏による『ヨアヒム・ラフ、生涯と作品 *Joachim Raff, Leben und Werk*』（2014）のなかでも多くの一次資料が使われているが、ラフ直筆の書簡や記録がデータ化され、自由にオンラインで閲覧することができることは様々な観点から当時の社会的文脈にラフを位置付けることが可能となるだけにこのプロジェクトの意義は大きい。またコルブ氏はラフ研究の意義について、新ドイツ派のメンバーとしてラフがどのような活動を行い、どのような考え方をもっていたのかについて文献研究を行うことで新ドイツ派という楽派がもつ諸相の一部を明らかにしうることについて言及し報告者も同意するところであった。今回のラフ研究者との会談は有意義であり、これは地元の記事に掲載されている（別紙参照、<http://www.schwyzkultur.ch/nachrichten/kunst-und-wissenschaft-auf-den-spuren-von-joachim-raff-9200.html>）。

これに加えて現在ラフ協会に集められている資料は膨大なものであるが、ラフの書簡集の他にグスタフ・シリング（編）『ベートーヴェン・追悼アルバム *Beethoven-Album : Ein Gedenkbuch dankbarer Liebe und Verehrung für den grossen Todten*』（1846）の閲覧を行った。同著はベートーヴェン没後20年の記念として当時の作曲家たちによる寄せ書きとなっており、その中にラフの頁が含まれている。

### 5.5 チューリッヒ

チューリッヒでは、チューリッヒ芸術大学オルガン科の授業をグロスミュンスター大聖堂において聴

講ずる機会に恵まれた。またヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms, 1833-1897) が初演を行ったトーン・ハレ管弦楽団を第1ヴァイオリン奏者であるキリアン・アンジェイ氏の協力によって視察を行った。また、ドレスデン蜂起に加わったために亡命中であったヴァーグナーが滞在した住居の視察を行いチューリッヒにおける19世紀中期から後期にかけての作曲家たちの動線を確認することが出来た。

## 5.6 ミュンヘン

バイエルン州立図書館は、ラフの娘であるヘレーネが寄贈したラフの一次資料、「ラフィアーナ *Raffiana*」が所蔵されている。2015年にはまだオンラインで閲覧できるものは少数であったが今回の海外調査のための問い合わせの度にオンライン化が進み開示された。現地ではラフィアーナの資料及び関連資料を閲覧することが出来た。友人であるハンス・フォン・ビュロー (Hans von Bülow, 1830-1894)、新ヴァイマル協会の会員との書簡だけでなく、成績証明書、教員免許の認定書学業修了書、演奏会告知もこのラフィアーナに含まれている。内容の分析は今後の課題であり、資料の量を考えると継続的な調査が望まれる。そしてこの一部はニューヨークのJPモルガン図書館にあることを確認している。

## 6. 考察

①今回の調査では、《アルフレッド王》のフルスコアとヴァーグナーのオペラの編曲の楽譜を入手することが出来た。交響曲の作曲よりも前に既にオペラが上演されていることになり、ヴァイマル期の初期が作曲家としての飛躍の時となったと捉えうるだろう。そしてヴァーグナーのオペラ編曲について、初版からの楽譜の販売状況や著作権の変遷を含む経緯が明らかになればヴァーグナーの作品の影響力を知り得る一つの切り口となることが考えられ、ひいてはラフの貢献を示すことにもつながるであろう。また、ヴァーグナーの《ローエングリン》(1848)はヴァイマル宮廷劇場でリストが指揮をして初演(1850)された作品である。ラフは、この編曲を1853年に行った後、『ヴァーグナー論 *Wagnerfrage*』(1854)を執筆したことになる。この『ヴァーグナー論』がその後ヴィースバーデンに移ったことと関係があるかどうかについて書簡や記事と共に本著の解題を行うことは重要であると考えている。

ヴァイマル期からヴィースバーデン期の資料調査では非常に多くの文献資料が残されていることが明らかとなった。さらに *NZfM*におけるフランツ・ブレンデルとの対話やヘレーネが編纂した *Die Musik* におけるリストとの往復書簡集を分析対象に加えると、ラフのヴァイマル期に重なる新ドイツ派の活動とその影響について、ラフの観点から明らかにできる点があると考えられる。調査の各地域を巡る中で常にラフとともにリストやヴァーグナーの動線が重なっており、ここからは当時の音楽家たちが演奏や出版のために各地を動き回っていた事、そしてたくさんの人びととの関わりを持ちながら活動を行っていたことを見てとることが出来た。そしてラフが活動拠点を変えていく理由についても19世紀の社会と結びついた音楽活動の一端が表われていると考えられ、そこからは音楽と社会の関わりを見出すことができる。

②ラフ協会における意見交換は大変有意義であり今後も継続していく予定である。ラフの一次資料のデータ化についてその進捗を知ることや、お互いの研究について意見交換を行うことは、固定化された概念で捉えることが難しい新ドイツ派という19世紀半ばから後半における音楽活動をみる際に必要となる多角的な観点をもつ意味において有効であろう。

③ラフのヴァイマル期の調査では、新ドイツ派がキーワードとなった。今後の研究においてこの新ドイツ派について整理することで今回得られた資料の分析に役立てたい。

## 7. 謝辞

お茶の水女子大学文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムに採択をいただき、深く感謝を申し上げます。

本海外調査を遂行するに当たり、ご指導をいただきました指導教員の永原 恵三教授、準備段階からご助力を賜りました関係各位の皆様にご心より感謝を申し上げます。

<sup>1</sup> シェーファーの作品目録によれば、ヴィースバーデン期(1856年から76年)には、op.68からop.205及びWoO.Nr.3-12が作曲された(Schäfer 1888: 32-117)。この中で交響曲は全11作品のうち、第1番から第8番までの8曲が書かれている。

<sup>2</sup> 第1番《祖国に》(1859-61) op.96、第2番(1866) op.140、第3番《森にて》(1869) op.153、第4番(1871) op.167、第5番《レノーレ》(1872) op.177、第6番(1873) op.189、第7番《アルプスにて》(1875) op.201、第8番(1876)《春の響き》op.205、第9番《夏に》(1878) op.208、第10番《秋に》(1879) op.213、第11番《冬》(1876) op.214。括弧内は作曲年。

## 参考文献

- BERTAGNOLLI, Paul A. (2002) "Amanuensis or Author? The Liszt-Raff Collaboration Revisited." *Nineteenth Century Music*. California: Oakland: University of California Press: 26-1: 23-51.
- BEVIER, Carol S. (1982) *The Program Symphonies of Joachim Raff*, Diss. Texas: Denton: North Texas State University.
- BROWN, A. Peter. (2007) *The Symphonic Repertoire, Vol. III part A. The European Symphony from ca. 1800 to ca. 1930: Germany and the Nordic Countries*, Indiana: Bloomington: Indiana University Press: 825-937.
- DEAVILLE, James. (2001) "Raff, (Joseph) Joachim", SADIE, Stanley; TYRELL, John(eds.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*.(2nd ed.),London: Macmillan: 19: 752.
- FINSCHER, Ludwig. (1998) „Symphonie“, FINSCHER, Ludwig (Hg.) *Die Musik Geschichte und Gegenwart*, Sachteil 9, Kassel: Bärenreiter: 75-78.
- GATHY, August. (1840) *Musikalisches Konversationslexikon*. Hamburg: Riemeyer: 425.
- GROTJAHN, Rebecca. (1998) *Die Sinfonie im deutschen Kulturgebiet 1850 bis 1875: ein Beitrag zur Gattungs- und Institutionengeschichte*. Sinzig: Studio.
- KIRBY, Frank. E. (1995) "The Germanic Symphony of the Nineteenth Century: Genre, Form, Instrumentation, Expression" *Journal of Musicological Research* 14(2): 193-221.
- . (2001) "The Germanic Program Symphony in the Nineteenth Century (to 1914)" ed. ARIAS, Enrique Alberto; et al. *A compendium of American musicology: Essays in Honor of Joh F. Ohl, IL*: Evanston: Northwestern University Press: 195-211.
- KOCH, Heinrich Christoph. (1802) *Musikalisches Lexikon*. Frankfurt am Main: Hermann: 1384-1385.
- 倉脇, 雅子. (2016) 「ヨアヒム・ラフ作曲 交響曲第1番 ニ長調《祖国に》op.96の研究」お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科修士論文.
- LEUCHTMANN, Horst. (1997) 「ラフ, ヨアヒム」柴田南雄; 遠山一行 (監) 『ニュー・グローヴ世界音楽大事典』東京: 講談社: 19: 239.
- MARTY, Res. (2014) *Joachim Raff. Leben und Werk*. Altendorf: MP Bildung, Beratung und Verlag.
- MÜLLER-REUTER, Theodor. (1909) *Lexicon der Deutschen Konzertliteratur*. Leipzig: C.F.Kahnt: 377-434.
- RAFF, Helene. (1925) „Joachim Raff, ein Lebensbild.“ *Deutsche Musikbücherei*, Bd. 42, Regensburg: Gustav Bosse.
- SCHÄFER, Albert. (1888) *Chronologisch-systematisches Verzeichnis der Werke Joachim Raff*, Tutzing: Hans Schneider.
- . (2011) 英語訳 *A Catalogue of the Music of Joachim Raff*. THOMAS, Mark (trans.), s.l.
- Schilling, Gustav. (1846) *Beethoven-Album: ein Gedenkbuch dankbarer Liebe und Verehrung für den grossen Todten*, Stuttgart: Hallberger.
- STEINBECK, Wolfram. (1997) „Nationale Symphonik und die Neudeutschen: Zu Joachim Raffs Symphonie An das Vaterland“. *Musikgeschichte zwischen Ost- und Westeuropa: Symphonik –Musiksammlungen*, Sinzig: Studio: 69-82.
- WIEGANDT, Matthias. (1997) *Vergessene Symphonik? Studiren zu Joachim Raff, Carl Reinecke und zum Problemder Epigonalität in der Musik*, Sinzing: Studiopunkt.
- [楽譜]
- RAFF, Joachim. (2007) *Symphonie Nr.1 An das Vaterland. Eine Preis-Symphonie in fünf Abteilungen für das grosse Orchester. D-dur. op.96 (1859-1861)*, LEICHTLING, Avrohom (ed.), München: Höflich.
- [ウェブサイト]
- THOMAS, Mark. (1999) "Joachim Raff." Accessed Aug. 29. 2016. <http://www.raff.org/>.
- MARTY, Anton. (1974) "Joachim Raff Gesellschaft." Accessed Dec. 21. 2016. <http://joachim-raff.ch/>

くらわき まさこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

## 「指導教員によるコメント」

倉脇雅子さんの研究調査は、19世紀ドイツにおいて大変人気のあった作曲家、ヨアヒム・ラフに関する一次資料の収集および閲覧、さらにチューリッヒにあるラフ協会を訪問し、そこに所蔵されている資料類の閲覧とラフ研究者とのネットワークを構築することを目的としています。日本において、ラフの研究はほとんど行なわれておらず、倉脇さんの研究は日本でも数少ないもので、19世紀の西洋

音楽研究がどうしても大作曲家に偏らざるをえないところを、丹念な研究手法で19世紀ドイツ音楽のコンテクストを読み取り、その音楽表現のなかに、当時のドイツ人の思想へと迫ろうとしています。また、同時代のほかの作曲家との関係をも導き出すように、さらなる研究の糸口になることが期待されます。

以上から、倉脇雅子さんの海外調査研究は充実した内容であったと判断します。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科(人文科学系)・永原 恵三)

## **The significance of Raff's music activities in the period of 1850s-1870s**

Masako Kurawaki

I made a tour round Frankfurt, Weimar, Zurich and Munchen for the purpose of gathering materials relevant to Joachim Raff's (1822-1882) music activities during the 1850s, 60s and 70s. The tour was also meant to trace the footsteps of composers who belonged to the Neudeuetsche Schule. Where does Raff stand in relation to Neudeuetsche Schule? What influence, if any, did he have on Neudeuetsche Schule? A close look at the research results may give clues and answers to these questions.